天保年間の沖冠岳
―大坂への移転／蘭方医との関係―

梶岡秀一

1　論の意図

平成二十九年（２０１７）で生誕二百年を迎えた今治出身の画家、沖冠岳の生涯については、七年前の拙稿「江戸文苑の画家 沖冠岳 ―経歴に関する史料の研究―」(1)で事実関係を明らかにし得る史料を挙示して考証しながら総合したことがあり、それから七年を経た今年、生誕二百年記念の展覧会図録に載せた拙稿「沖冠岳伝の研究」(2)では、新たに発見した作品や資料を踏まえながら、あらためて事実関係を時系列に整理し直した。前者は、基礎資料となる史料とともに主な作品、特に落款をも取り上げたのに対し、後者は、作品への言及を一部に止め、あくまでも冠岳の生涯をたどることに徹した。

しかるに、実をいえば後者において新たに提起し得た事実は主に天保年間の事跡であり、根拠は主に作品に見出される。しかも天保年間は、冠岳が二十歳代で、彼の画業の基礎が築かれた時期である可能性がある。あらためて詳述しておくべきであると思われる。これが本稿の前半の趣旨ではあるが、後半の目的は新見解の追加であり、展覧会図録に拙稿を載せた直後に敢えて本稿を書き足しておく意味がそこにある。(なお、年齢については全て数え年を用いる。)

2　文政年間と嘉永年間の間

冠岳の生涯の内、数回の画期については現時点で明らかにし得ているが、極めて重要な画期が今なお明らかではない。画道修業のため今治から京都へ出て、京都の岸派に留まっていた時期が定かではないのである。

七年前の拙稿で明らかにし得たのは、文政十年（１８２７）、十一歳の時点では今治にあったこと、そして嘉永年間までには江戸へ出てきていたことである。文政十年には冠岳が制作した絵馬が今治の綱敷天満神社へ奉納され、嘉永年間には、嘉永二年（１８４９）頃の見立番付『江戸現在画家品評』や嘉永三年の畑銀雞編『江戸文人藝園一覧』、畑銀雞著『現存雷名江戸文人壽命附』二編に駿河台在住の冠岳の名が記載されたからである。その上で、落款の書風の検討からは、弘化四年（１８４７）、三十一歳の時点では江戸へ移転していた可能性を想定していた。

ゆえに、京都の岸派の門で修業していたのは十歳代から二十歳代までの期間にまたがる天保年間だったろうとは想像されていたが、七年前の拙稿ではそのことを明言してはいなかった。

3　平安冠岳落款

幸い、今年の展覧会へ向けた準備の過程で、天保十年代の作品二点を新たに発見し得て、その落款から重要な事実を知ることができた。一つは《鴨之図》一幅であり、もう一つは《群猿図》一幅である(3)。

絹本墨画淡彩《鴨之図》(個人蔵)には「天保庚子夏写於平安川冠岳」の落款があり、天保十一年（１８４０）、二十四歳の夏の作品であると判るが、「於平安」と記されてあるから、このとき京都にあったことは明白である。

興味深いことに、彼の姓は「川」と記されてある。彼の姓は本来「中川」であり、「中」と「川」の二文字を一文字に合成して「沖」を姓にしたのは彼自身であることが子孫の方々の間に伝承されていた。この落款によって少なくとも天保十一年の時点では未だ「沖」姓で固定してはいなかったと判る。二文字の姓を一文字に表すのは文人らしい唐風の趣味ではあるが、通常は二文字の内の何れか一文字を用いるから、冠岳も当初は「中川」二文字の内「川」一文字を用いていたわけである。しかし「川冠岳」の三文字の並び具合が安定感を欠くのは《鴨之図》を見れば一目瞭然である。「中川」から「沖」への改姓の意図は、落款の姿形に安定感と美を獲得することにあったと見ることができる。

絹本着色《群猿図》一幅（個人蔵）には「天保辛丑春写於平安予章府中沖庸」の落款があり、天保十二年、二十五歳の春にも京都にあったことが判る。しかも、このとき既に「沖」の姓を用いていた。ゆえに、天保十一年までは「中川」姓を用いていたと同時に、翌年までには「沖」姓へ改めたと判明するのである。

この落款では「予章府中」という部分も注目に値する。「予章」は元来は漢や晋、隋が用いた古い地名ではあるが、日本では中世以降、伊予国（予州）の別名として用いられることもあった。例えば中世の伊予に一大勢力を築いた河野氏（越智氏河野流）の歴史を記した室町時代成立の文書が『予章記』と名付けられたように。対するに「府中」は古代に国府が置かれた地域を指す語であり、伊予の府中は国分寺と国分尼寺が現存する今治であると考えられる。落款に「予章府中」と記したとき冠岳はその語に郷里への誇りを込めたに相違ない。

これに関連して、彼が晩期に「越智姓沖氏名庸字展親」と刻した印象を愛用したことの意味を考えてみてもよい。彼は古代の伊予国を支配した豪族、越智宿禰の末裔であると称し、誇りに思っていたと解される。岸派の祖である岸駒のような当代最高の巨匠でさえも、京都人ではなかったことから京都では軽んじられることが多かったらしいと踏まえるなら（4）、伊予国出身の若者だった冠岳が、古代から開けていた「府中」今治の出身であること、しかも古代の名族の末裔であることを強調したとしても、その心理は容易に共感され得るのではなかろうか。

ともかくも、以上二点の作品に見える「於平安」の落款によって、冠岳が天保十二年までは京都で活動していたこと、しかも天保十一年までは「中川」姓を名乗り、翌年には「沖」姓を名乗っていたことが判明したのである。

このことを今年、展覧会図録に載せた拙稿でも軽く論じてはいたが、詳述すれば以上のような次第である。以後に続く論は、展覧会図録でも触れ得なかった新見解の提案である。

4　大坂に移転していた可能性

天保年間の年記を伴う作品は、他にも二点ある。一つは《月梅図》一幅であり、もう一つは《瀧見観音像》一幅である（5）。

絹本墨画淡彩《月梅図》一幅（個人蔵）には「天保壬寅冬冠岳沖庸」の落款があり、天保十三年（１８４２）、二十六歳の冬の作品であると判る。画風は、いかにも岸派における沈南蘋風の花鳥画を想起させる。しかし岸派からの影響は冠岳の画業において晩期まで認められるわけであるから、そのことは制作の場所が京都だったことの根拠にはなり得ない。

対するに、絹本墨画淡彩《瀧見観音像》一幅（個人蔵）は天保十四年（１８４３）、二十七歳の時点で冠岳が大坂に移転していたのかもしれない根拠を提供し得る。

落款には「冠岳沖庸謹拝写」としか記されていないが、賛には「癸卯禩応需杜絶真阿行賛」の落款があるから、作品も天保十四年までには成立したと判る。着賛した「杜絶真阿」が何者であるのかは定かではないが、「真阿」という名に注目するなら、天明六年（１７８６）に生まれて安政六年（１８５９）に逝去した天台宗の学僧、宗淵である可能性がある。京都人であり、『平安人物誌』にも名を記された碩学である。文政十年には伊勢国の津の西来寺に招かれ、真阿の号を用いた。冠岳が「謹拝写」したように真阿も「禩（祀）応需行賛」したのであるから、

冠岳と真阿との間に直接の関係があったとは断定できない。むしろ冠岳に絵を需め、真阿に賛を需めた者が別にいたと考えるべきだろう。それは誰か。箱の中には旧蔵者に関する一通の書付がある。昭和六十年（１９８５）の文書ではあるが、内容は具体性に富んでいる。それを信じるなら元来の所蔵者は大坂で能楽師をしていた大槻家だったようで、大槻家の娘が二代目武田元助に嫁いだ際に持参し、武田家に伝わっていたらしいのである。大槻家も武田家も大坂の人々であると考えられるから、天保十四年の時点で、大坂の富裕の人々の間には冠岳の名が知られていたと推察される。この場合、京都にいた数多の画家たちの中で彼が大坂でも知られていたと考えるよりは、彼自身が大坂に住んでいたと考える方が自然ではなかろうか。そもそも大坂にも多くの画家たちがいたのであるから、京都の画家に制作を依頼するよりは大坂の画家に依頼する方が自然だったはずである。天保十四年、二十七歳の冠岳が大坂へ移転していた可能性があると推察される所以である。

そして冠岳が大坂へ移転した可能性を考えるとき、冠岳と医学との関係があらためて意義深く思われてくるのである。

5　冠岳と蘭学

従来、冠岳を医学に関連付けた論は、七年前の拙稿を除けば皆無だった。しかし彼を医学に結び付けることは何も不自然ではない。なぜなら彼の最初の師だったと伝えられる山本雲渓が、絵師である前に先ずは医師だったからである。

冠岳子孫の沖憲之氏によると、沖家には冠岳の父の中川正晴が松山で医師をしていたとの伝承があるようである。中川正晴が医師だったなら、医師同士の人脈を通じて冠岳が今治の雲渓に師事したと考えるのが自然だろう。当然、冠岳は雲渓に画道だけを学んだのではなく、医術をも学んだに相違ない。絵師と医師を兼ねた例として英一蝶があったように（6）、冠岳が雲渓と同じく医師でもあったとしても奇異ではない。そして医師だったとすれば薙髪していたに相違ない。実際、かなり後の話ではあるが、嘉永三年（１８５０）に刊行されたと推定されている畑銀雞著『現存雷名江戸文人壽命附』二編に掲載された冠岳の似顔絵を見ると、彼は薙髪していたと判るのである。以上のようなことを、七年前の拙稿でも触れてはいた。

しかるに、冠岳と医学との関係に着目するとき、大坂という場所の重要性が浮かび上がってくる。例えば、緒方洪庵が大坂に蘭学塾（適塾）を開いたのは天保九年（１８３８）である。京都の岸派の門で沈南蘋流の花鳥画を学び、恐らくはその彼方にある西洋絵画をも意識していたかもしれない冠岳がそうした動向に関心を抱いていた可能性を、想定してみたくもなるというものである。

そして実をいえば、冠岳は実際に大坂の蘭学者と接点を有していた。

根拠は、彼が制作した高良斎の肖像画である。今年、展覧会図録に載せた拙稿でもこの肖像画の存在には触れておいたが、ここであらためて取り上げる。

残念ながら原本の行方は不明ではあるが、幸い、福島義一氏の著『高良斎とその時代』にその写真が掲載されてある（7）。画面の左下には「天保十五年歳在甲辰春二月初五日冠岳沖庸写」の落款が見えるから、天保十五年（１８４４）、冠岳二十八歳の二月五日の作品であると判る。このとき良斎は四十六歳だった。

良斎は徳島出身の蘭方医である。寛政十一年（１７９９）、阿波国徳島藩士の山崎好直の次男として生まれ、生後まもなく眼科医の高錦国の養子となった。養父に医学を学びながら、十三歳で徳島藩の本草学者である乾純水に本草学を学び、十九歳の十月、長崎へ遊学。文政五年（１８２２）に帰郷したが、翌年には再び長崎へ戻ってシーボルト鳴滝塾の門人となった。塾頭も務め、師からの信任が厚かった。シーボルト事件には良斎も連座したが、文政十二年（１８２９）、師が日本を去る際に娘イネとその母の将来を託した相手は、最も信頼した門人二名、伊予国出身の二宮敬作とともにこの良斎だったのである。天保二年（１８３１）、徳島へ帰郷したのち、天保七年、三十八歳で大坂へ出て蘭学塾「照淵堂」を開業した。以後は弘化三年（１８４６）に逝去するまで大坂で活動し続けた。この間、大坂

への移転に際して支援してくれた篠崎小竹のほか、同時期の大坂に適塾を開いた緒方洪庵とも親交を結んだことが知られる。

当然、天保十五年の時点では良斎は大坂にあった。ゆえに冠岳が良斎の肖像画を制作した場所も大坂だったはずである。照淵堂の門人には今治出身の田窪良益がいたようであるから（8）、そうした郷里に絡んだ人脈によって肖像画の作者に選ばれたと想定できなくもない。この場合、冠岳が京都に住んでいた可能性を必ずしも排除し切れないが、そもそも大坂にも多くの画家たちがいた中で、京都の画家に制作を依頼するよりは、大坂において親交のあった画家に依頼する方が自然だったはずであるから、やはり冠岳自身が大坂で活動していて、しかも良斎の周囲とも関係を有していたと考えるべきではなかろうか。

冠岳が天保年間の末期に大坂へ移転していたと仮定するなら、その理由をどう考えることができようか。岸派の元祖である岸駒でさえも悩まされたような、地方出身者に対する京都人の冷たさを嫌ったと想像することも不可能ではないが、むしろ医学や蘭学への関心に導かれて冠岳は大坂へ移ったのではないか。そのことは、岸派における新時代の異国趣味への関心とも一致してはいなかったろうか。

6　結

冠岳は天保年間までには京都で修業し、嘉永年間までには江戸へ進出していた。しかし京都修業の時期と江戸進出の時期との間には、大坂で活動した短い時期もあったのではないか。しかもその間、冠岳は大坂の蘭学者たち、特にシーボルトの学統を受け継ぐ人々に親しく接していたのではないか。そのような可能性を想定してみることが、今後の探究に必要であると考えられる。

註

（1）梶岡秀一「江戸文苑の画家 沖冠岳 ―経歴に関する史料の研究―」、『愛媛県美術館平成２２年度年報・紀要第１０号』（２０１１年、愛媛県美術館）。

（2）梶岡秀一「沖冠岳伝の研究」、『生誕二〇〇年 沖冠岳と江戸絵画展』（２０１８年、「沖冠岳展」実行委員会）。

（3）前掲註２『生誕二〇〇年 沖冠岳と江戸絵画展』には、《鴨之図》は図版１、《群猿図》は図版２として掲載した。

（4）狩野博幸『江戸絵画の不都合な真実』（２０１０年、筑摩書房）、１５９―１８５頁。

（5）前掲註２『生誕二〇〇年 沖冠岳と江戸絵画展』には、《月梅図》は図版３、《瀧見観音像》は図版５として掲載した。なお、前掲註１「江戸文苑の画家 沖冠岳」では《瀧見観音像》を《白衣観音像》と呼んでいた。今回は箱書に従って《瀧見観音像》と呼んでいる。

（6）前掲註４『江戸絵画の不都合な真実』、５１頁。

（7）福島義一『高良斎とその時代 附・日本散瞳薬伝来史』（１９９６年、思文閣出版）の口絵に図版として掲載されている。

（8）前掲註７『高良斎とその時代』、８８頁。